

## インドネシア旅行記

2006年9月、帝国書院 海外撮影隊の5人は、熱帯の人々の暮らしや農業、作物の調査・研究を行うためにインドネシアへと飛んだ。そもそもインドネシアと聞くと何を思い浮かべるだろうか。日本人に人気のバリ島がインドネシアの一部だということを知らない人も多いと聞く。飛行機からの空中撮影の許可が出ず、直前で予定を変更したりもしたが、二週間の予定で成田を出発した。

### 首都ジャカルタ



最初に降り立ったのは、首都ジャカルタ。東南アジア独特の、いろいろなものが混ざった匂いとともに、じめっと暑く重い空気が全身をつつむ。ジャカルタは人口1,000万人を超える大都市であり、インドネシアの政治・経済の中心地である。日系企業の進出も多く見られ、街にはトヨタ、三菱といった日本車があふれている。バジャイと呼ばれる小型の三輪自動車(タクシー)も街の喧噪に拍車をかけているが、とにかくものすごい交通量と活気に圧倒されてしまった。

写真1 ジャカルタの目抜き通り、タムリンの様子

写真2の中央、半円のドームがある建物が東南アジアで最大規模のイスラム教礼拝堂、イスティクラル・モスクである。インドネシアは世界一のムスリム人口を要する国であるが、イスラム教が唯一の国教というわけではない。イスラム教・プロテスタント・カトリック・仏教・ヒンドゥー教の5つが国に認められている宗教であり、人々はそのいずれかを信仰している。実際、このモスクのすぐ隣にはカトリックの大聖堂、カテドラルが建っている。宗教が対立することなく共存している姿は、世界に向けた一つのモ



デルになるのではないだろうかと感じた。 写真2 イスティクラル・モスク



写真3 港の見張り棟からみた庶民の家々

続いて訪れたのがジャカルタ北部のコタ地区。オランダ統治時代、バタビアと呼ばれていたジャカルタの政治の中心地でもあった場所だ。オランダ時代の古い建物が立ち並ぶ一方、中華街があったりと、庶民が暮らすエリアでもある。写真3はオランダ時代の港の見張り塔から庶民が暮らすバラックを写したものである。衛生的とはいえない環境の狭いエリアにたくさんの人が住んでおり、子どもたちは汚れた服を着て裸足で遊んでいた。

一方、写真4はジャカルタ南部、ブロックMと呼ばれる繁華街にあるデパートである。入り口には警備員がおり、手荷物検査を受けた上で入店する。こちらに買い物に来る人は、皆きれいな格好をしており、生活にゆとりがあることが感じられる。海外のブランドショップが並び、マクドナルドもある。めずらしいメニューではチキンとライスのセットなども販売されている。



写真4 ジャカルタのデパート

この二つの場所を訪れて、インドネシアの人々の生活格差がとても大きいことを改めて実感した。地方から都市へと低所得者が移

り住みスラムを形成する一方で、一部の高所得者は高級マンションに住み、デパートに買い物にでかける。同じ都市に住みながら二者の生活は完全に分離している。この格差問題の解決には時間がかかりそうな印象を持った。



写真5はジャカルタ在住の家庭にお邪魔したときのものです。ちょうど晩御飯をご馳走になったのだが、メニューは辛く味付けした鶏肉、野菜、レンダンとよばれるカレーなどをご飯にのせ、混ぜながら食べる家庭料理、ナシチャンプル（ナシは「米」、チャンプルは「混ぜる」の意）やココナッツミルクのデザートなどだった。熱心なムスリム一家で豚肉、お酒は飲まず、日に5回のお祈りも欠かしていないという。

写真5 ジャカルタの家族

### カリマンタン島

再び飛行機に乗り、今回の撮影の中心地であるカリマンタン島へと向かった。カリマンタン島は世界で3番目に大きな島でありマレーシア・ブルネイ・インドネシアの3カ国からなる島である（マレーシア、ブルネイではボルネオと呼ばれている）。

最初に訪れたのは西カリマンタンの州都、ポンティアナックである。カプアス川の河口に位置するこの街は、かつて川の上流で切り出した木材を積み出す港として栄えたところである。まず向かったのは赤道記念館。赤道直下に位置する場所にちょっとした記念館がつけられている。記念碑の足下、ちょうど赤道のラインのところは、排水溝になっていた。

インドネシアは島の数だけ料理の種類もあるといわれているが、ここポンティアナックは海沿いなので魚やえびなどの魚介類の種類が多く、安くおいしかった。



写真6 赤道記念館



翌朝訪れたのが朝市である。南国の暑さを避けるため夜も明けきらないうちから多くの露店が出る。魚、野菜、果物など、南国ならではの鮮やかな食料がそろっており見ているだけでも楽しくなる。カプアス川に架かる橋の上からは、水上集落の様子がよく見えた。きれいとはいえない川の水で住民が洗濯や歯磨きをしていた。板を渡してあるだけの通路を器用にバイクで走る人も見かけた。



写真7 朝市の様子



写真8 水上集落の様子



写真9 石油コンビナートの様子

続いて訪れたのがインドネシアの石油基地となっているカリマンタン島東部の都市、バリックパパンである。インドネシアの石油資源は国営のプルタミナ社が一元管理しているが、カリマンタン島の東岸には原油や天然ガスなどの地下資源が豊富にあるため、この地には大規模な石油化学コンビナートがある。そのため海外からのビジネスマンも多く、きれいな街というのが最初の印象であった。プルタミナの社員の社宅は大きくて立派なものであり、石油資源が地域経済に活力を与えていることがわかる。一方、コンビナートのすぐ近くにはカンポン・バルと呼ばれる下町があり、庶

民ののんびりとした暮らしを垣間見ることができた。カメラを向けると照れながら指でピースサインをする子どもたちの姿が印象的であった。

翌日、車で東カリマンタンの州都であるサマリダへと向かう。沿道にはコショウ、油ヤシ、キャッサバなどの熱帯作物を育てている畑が広がっており、たくさん写真を撮ることができた。ちょうどコショウとキャッサバは収穫している最中であり、収穫風景も撮影することができた。また、いたるところに森林や草原を焼き払った跡が広がっていた。大規模な森林火災を受けて、焼畑は禁止されたのだが実際にはまだ行われているようである。

サマリダはマハカム川に面した街で南洋材や石炭の輸出基地として栄えている。川面には上流のトンガロン周辺でとれる石炭を運搬する船がひっきりなしに往復していた。

ここで訪れた市場、パサール・パギもとても活気のある市場である。肉・魚・野菜・果物・衣料品・電化製品などがところ狭しと並べられており、たくさんの人たちがとても賑わっていた。



写真 10 石炭の運搬船

## まとめ

今回の撮影旅行で強く感じたこと、まずは貧富の格差の問題である。大多数の庶民は狭い家に住み、路上の屋台で食事をしたりつつましく生活している。一方、一部の高所得者は高い服を着てデパートで食料を買い、衛星テレビ、インターネットを自由に使っている。生まれたときから格差があり、生活や将来が決められているのがとても不条理な気がした。しかしながら、どんな人たちもたくましく、楽しんで生活を送っているように感じられた。会社勤めをしている人も残業はせず、夜ご飯は家族と必ず一緒に取るという（そのためジャカルタの帰宅ラッシュはものすごい）。そうした自分の生き方を知っていて強く生きているインドネシアの人々が美しく思えた。

もう一点、強く感じたこと。それは人間の適応力である。あたりまえのことではあるが、寒い地域では太陽はありがたく、恵みをもたらす。しかし赤道直下のインドネシアでは猛烈な酷暑で、体力を奪っていく。しかし高床式住居に住む、辛い物を食べる、水浴びをするなど、環境に合わせて工夫し、適した生活をする、人間の本能、底力を強く感じた旅行であった。

( A . K )